ソシュール以前とソシュール

はじめに

西欧近代は、理性的な自我作用をもつ個人を世界の中心に置いて、外界対象世界を分析する主体となし、主体の理性的、合理的な思考を駆使して、対象世界の各構成要素へと分け入り、それぞれの本質的特徴を洞察して全体像を把握すると言った世界認識の構造をもって、科学的な真実、唯一絶対の真理を求めようとする思考を確立したと言えよう。

この認識構造、その静止的な概念構成に対する批判の系譜、レヴィ＝ストロースの構造主義は、対象の認識にあたって、いわば時間軸を入れて対象の変化を眺めようとするのであり、その変化、通時的に引き続く変換の背後に、時を超えて動かずにあり続ける「共時態」とする「構造」を認めて、それを捉えようとする。

このような構造主義的な思考、認識構造の誕生に多大な影響を与えたのは、1926 年プラハで結成された言語学のサークル、プラハ学派の音韻論であり、その中心的なメンバー、ヤコブソン（ロシア人）とレヴィ=ストロースは、ニューヨークの「高等学術自由学院」の亡命講師同士として第二次大戦中出会い、互いの講義を聴講し合ったという仲だという。「親族関係の講義」を聴講したヤコブソンの「それを本に書き給え[1]」という言葉に触発されて、レヴィ=ストロースは 1943 年、亡命先のニューヨークで、主著とされる『親族の基本構造』を書き始めたという。参）https://www.kinokuniya.co.jp/c/20131206112952.html

１．ソシュールとプラハ学派

ヤコブソンらのプラハ学派は、ソシュール（1857-1913）の影響を受けてできた構造主義言語学の一学派とされるが、「言語音としての音素を発見したことによって誕生したと言ってもよい[2]」と指摘されている。ソシュールにおいては「まだアイディアにとどまっていた感のある」言語の体系を、具体的に「音素の体系」として発見したのはトルツベツコイであり、その「体系という見方」を進展させて「変換と切り離す事の出来ない＜構造＞という見方[3]」までつないだのが、ヤコブソンである。

1939 年にヤコブソンは「音素の構造について」の中で、世界中の言語音声は 12 対の音素の組み合わせ（示差で構成されているという、音素の集合である言語音声は、音素が列をなして響き合う音響的な構成であり、音と言語の指し示す意味の間には、何の必然性、法則的関係はなく自由、もしくは「恣意」であり、言語音声は物理音でありながら、その聞き分け

---

[1] クロード・レヴィ=ストロース　ディディェ・エリボン　竹内信夫訳『遠近の回想』P84　みすず書房　1991 年 12 月 25 日

[2] 小田亮　『レヴィ＝ストロース入門』P68 ちくま新書 265　筑摩書房 2013 年 9 月

[3] 同上 P72

られ方は、各言語集団の取り決め、「一種の文化（もしくは社会制度)」であるとする、ソシュールの言語論、音声と意味とのつながり、シーニョ（記号）の構造は、言語音の中の「音素」とその「二項対立関係」によって、その輪郭がなぞられたわけである。

20 世紀の夜明けを迎えて、近代科学的思考の興隆の真っただ中で、世界の秩序は動かざる自然、それに対峙して、その自然科学的法則性や秩序を理性的に知る事ができる近代的自我、近代的理性の働き、その展開こそが近代科学であり、それを表現するところの言語であった。このような世界観が興隆するさなかで、言語音声の物理音的特徴と指し示す意味の法則性、各言語の歴史的な伝播、その展開の科学的解明が、当時の言語論の中心的なテーマとされていた。

この時代の真っただ中で、言語音声の物理的特徴と指し示す「意味」との間には、何の必然的関係は無く、全くの自由「恣意」であり、いわば無意識からの指定あるのみ、そしてかつ言語的の意味は、シーニョ間の関係によって浮かび上がると言う「記号としての言語論」その言語体系の構造がソシュールによって示された。

２．言語論の系譜

①　「クラテュロス」（ギリシャ・ローマ）

ギリシャにおいては言語（ロゴス）とは、「すべての言語活動の根底にあってこれに命を与えている理性的能力を指し示す[4]」とされ、ロゴスとは人間の知の根源を抱えているとされた。

ソクラテスの弟子にして、アリストテレスの師であるプラトンの初期対話篇「クラテュロス」、その副題は「名前の正しさについて」であり、世界最初の言語論といわれる。この中で師ソクラテスは、ヘルモゲネス、次にクラテュロスとの対話において「なぜ、ある対象はある言葉で呼ばれているのか？」、あるいは言葉とその指し示す対象との間の「本性的な結びつき」の有無について議論をすると言う。

ヘルモゲネスは、万物流転するというヘラクレイトスの流れを汲む若者であり、事物の命名は、社会的な約束事とするが、クラテュロスは名称と事物の間にある必然性、普遍的原理を述べるという。ここで師ソクラテスは「言葉は、それが対象の本性を現しているときに、よい言葉と述べた」とするのだという。言語とは契約か、それとも真理の黙示であろうか？この問いは 19 世紀まで引き続いていく。

そしてギリシャ・ローマは弁論の世界であり、言葉の技術に深い敬意がはらわれており、

---

[4] ロイ・ハリス/タルボット・Ｊ・テイラー共著　佐藤伸治/滝沢直宏協約
『言語論のランドマーク』Ｐ17　1997 年 11 月 20 日

その伝統から紀元後 500 年頃にはプリキアヌスがラテン語文法の決定版を表しており、さらに、東ローマ帝国の皇帝ユスティニアヌスのローマ法大全が 530 年頃に表され、前書はラテン語で書かれており､最後の 3 書はギリシア語で書かれた写本が残されていると言う。この時代のラテン語は、ローマ帝国の拡大発展と平行して、全ての学問を標す公用語として、そして帝国の統治のための言語であり、またローマ帝国域内の話し言葉として採用された。「ブリテン諸島から北アフリカ、大西洋から黒海に至る広い場所で話される言葉になっていた。[5]」のであり「ローマ人の言葉であるラテン語は当初から統治のための公用語であり文明の言葉」であったという。

②中世世界から近代へ

ラテン語はやがて国教となったキリスト教の布教のため、聖職者養成のために、キリスト教会、修道院組織内の教育施設（大学）において利用され、ラテン語の読み書き能力の必要性は大きく、その教育が組織的に行われて、やがて学問語（書き言葉）と民衆語（話し言葉）に分化していった。話し言葉の方はついには独立したロマンス諸言語(フランス語、イタリア語、プロヴァンス語、スペイン語、ルーマニア語など)へと展開し、他方ゲンルマン語も各地域領民の言葉として、それぞれはやがて国語としての認知を形成してゆく。

800 年に神聖ローマ帝国の王冠を戴いたカール大帝は、ゲルマン、キリスト教社会、ギリシャ・ローマを統合して西欧社会を作り上げたとされるが、彼は宮廷に知識人としての聖職者を集め、ラテン語を教育する宮廷学校を創設しており、ここで行政の言語にその時代に「唯一の書き言葉であったラテン語があてられたのは必然」であり、キリスト教とラテン語はヨーロッパの精神世界の中心に位置していった。

ヨーロッパ中世大学における科目群、リベラル･アーツ、自由七科には、ローマ末期の七つの科目に限定された伝統を引き継ぎ、ロゴスとそれに関連する技能として 5 世紀のプリスキアヌスのラテン語の文法書に習い、文法学、修辞学、論理学が最初に挙げられている。

やがてヨーロッパは近世社会を迎える。イギリス名誉革命は 1668 年、その前の王政復古が 1660 年のその年、パリ郊外の女子修道院の名を冠したフランス語文法書**『ポール・ロワイヤル（一般・理性文法）』**C.ランスロー・A.アルノー共著が刊行されている。この文法書は「ルネ・デカルトの『精神指導の規則』につよい影響を受けており、ノーム・チョムスキーによって､デ･カルト派言語学の最良のものという評価を受けている」（ウィキペディア)」と言う。それは「ポール・ロワイヤル文法に代表される主知主義[6]」あるいは「ポール・ロ

---

[5] ロイ・ハリス/タルボット・Ｊ・テイラー共著　佐藤伸治/滝沢直宏協約
『言語論のランドマーク』Ｐ6　1997 年 11 月 20 日

[6] 丸山圭三郎『言葉とは何か』P61　ちくま文芸文庫　900 筑摩書房 2009 年 4 月 30 日

ワイヤル的な観念論[7]」とも言えよう。

この文法書の正式の表題の「一般」「理性」という形容詞について、人間は「事物を認識するのみならずそれらを判断する」理性的動物であり、言葉は「この内在的観念体系を表す外的標識であるのだから、諸国語の顕在現象がいかにまちまちであろうとも、その潜在図式たる理性的世界表象に還元すれば、そこに見出される普遍的思考構造は同一であると考えるところに、一般的かつ理性的文法の名が冠せられる所以があった。[8]」と説明されている。「思考は言葉以前に形成された体系を持ち、言葉はそれを表す[9]」という、その役割が想定されている。時は主権国家の誕生とされるヴェストファーレン条約が 1648 年、その 12 年後の事である。

③　18 世紀から、近代の夜明け 19 世紀へ

聖書においては、旧約聖書、創世記二章、アダムは主なる神の前で「あらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけた」のであった。そして創世記 11 章のバベルの塔の物語は、一つの言語が話され意味を通じ合っていた人々は、不遜なる塔の建設を企てたが故に神の意思が顕され、それによって、「全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされた・・・」との記述のように、人々は互いに意味を伝え合う事ができない多言語を使う者達へと別れて、散ったというのである。

そして紀元一世紀の小アジアで編纂された新訳聖書の世界では、ヨハネによる福音書第一章第一節において「はじめに言葉ありき。言葉は神と共にあり、言葉は神であった。」とされ、このヘブライ語からギリシャ語へと翻訳された聖書においても、言葉は神からの贈り物であり続ける訳である。キリスト教社会の人々はバベルの塔の物語に限らず聖書の記述を歴史上の事実とみなしていたながい時代を経て、18 世紀を迎えて、やっとその揺らぎを迎える。

後に啓蒙の時代と呼ばれる 18 世紀の言語へのアプローチにおいて「新たな言語起源論を正統的な聖書の説明と折り合わせる事」を巡って論争が繰り広げられた。当時は「言語の起源」に関して互に対立する三つの仮説があり、一つは「正統派神学の側にたつ J.P,ズュース ミルヒの超自然的神的起源説」そして二つに「フランスの 唯物論者 E. B.コ ンディヤックの 自然的感覚論的発生説」三つめが「啓蒙主義者 J.J.ル ソーの社会的因襲的起因説」であった。そして 1772 年、ヘルダーはこの三仮説をいずれも「根本的に否定 [10]」

---

[7]　同上 P 62

[8] 丸山圭三郎　『言葉と無意識』P48　講談社現代新書 0871　2009 年 7 月

[9] 丸山圭三郎　『言葉とは何か』P58　ちくま文芸文庫　900 筑摩書房 2009 年 4 月 30 日

[10] 七字慶紀　「ヘルダーの言語観についてー「言語起源論」(1772)を中心に」
https://www.jstage.jst.go.jp/article/dokubun1947/28/0/28_0_29/_pdf　P2

するとして、言語が神によってではなく人間によって創造されたとする論を展開する。

ヘルダーの「言語の起源は人間の起源でもある」と言う展開、「言語は人間の精神的能の所産」とする考え方は、当時の言語学研究が、神学的・形而上学的な呪縛を解かれながらもなお、形而上学的な手法による哲学的な言語の起源論の展開の範疇にあった事を示していると言えよう。

そしてやがて科学が勃興する時代が到来し、1788 年のウイリアム・ ジョーンズによって「サンスクリット語が ヨーロッパ言語と類似の構造を持っていること」が示された。「ギリシャ語、ラテン語、ペルシャ語、スラブ語、ゲルマン語などとサンスクリットとを比較検討すると偶然とは思われないいくつかの共通性[11]」が見いだされると言う展開は、各言語の特徴について実証データを基に推論によったものであり、19 世紀的な科学実証主義的なアプローチ、実証的科学的手法へとむかう言語論の展開の方向を示していると言えよう。

④　19 世紀、近代の夜明け

神が作りたもうた森羅万象の中で、その法則性を科学的に読み解く事ができるという近代的な自我作用の働きへの確信の中で、さまざまな近代科学の諸学問が興隆する時代が到来した。近代の夜明け、19 世紀的西欧社会は、1826 年のマルサスの『人口論』、やがて 1859 年ダーウィンの『種の起源』が出版され、科学実証主義、観察主義的な手法、方法論による言語へのアプローチが目指された。

この影響下で歴史主義、伝播主義的なラング（言語、各国語）の検討が興隆し、言語の普遍性の研究において「具体的な言語資料を客観的に観察して、そこから一般的な変化の規則を導き出す[12]」といった手法による「比較言語学 comparative philology」が発展する時代[13]を迎える。

しかしながら、言語の指し示す意味とそれを知る事ができる人間存在との関係について、形而上学と科学の両者はともに「主／客の二項対立そのものは疑わず、＜普遍的カテゴリー＞が先か＜個物＞が先かと言い争ってそのいずれかを唯一絶対の根源的存在とみなそうとした中世の普遍論争から一歩も出ていない。」と指摘されるのであり、「だからこそ、形而上学におけるイデアが否定されればそれはマテリアにとって代わられ、キリスト

---

[11] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』 p 76　岩波書店　1989 年 10 月

[12] 町田健　『ソシュールと言語学』P18　講談社現代新書 1763　2010 年 1 月 18 日

[13] 山口裕之「言語学についての哲学的考察序説 ―概念の恣意性と意味の共有可能性―」P2 徳島大学　言語研究（Gengo Kenkyu）144: 1–27（2013）

教の＜神＞が死ねば近代科学の＜物＞がこれにとって代わる。[14]」とは丸山圭三郎の弁である。

人間を取り巻く環境、自然などは動かざる実体として存在し、その在り様を科学的に解明する人間の理性、それを表現する働きをなすところの言語であった。その理解こそが実体としての事物の名称を指し示す言語名称目録観であり、観念や抽象概念も含めて「その指し示す事柄、事物や観念を、一部の哲学者は、＜対象（ゲーゲンシュタント）＞と呼び、またある哲学者は＜意味（ベドイトゥング）＞とよんでいる。[15]」との指摘である。

3．ソシュールと 20 世紀の言語論

そして、「科学と呼ばれるものそれ自体もひとつのイデオロギーではないか[16]」と問われ始める 20 世紀の初頭、1907 年からジュネーブ大学で行われたソシュールの『一般言語学講義』は、記号論としての言語論を展開するわけである。その死後 1916 年、聴講生達の記録をもとにして『一般言言語学講義』が出版され、「無意識のうちにはたらく、差異のみからなる体系」、記号論としてのショシュールの言語論が展開する。

ソシュールの死後 15 年、『一般言語学講義』から 12 年、1928 年になってハーグにて第 1 回国際原学者介護が開かれ、ここでヤコブソン、カルツェフスキー、トルベツコイの三人が「プロポジション 22」という提案をして、この時に初めて新しい意味での音韻論が誕生した[17]と言う。この人々がプラハ学派と呼ばれる。

なにが新しいのかといえば、それは研究の対象が物理音としての言語音声ではなく、その言語を話す集団において、音声はどのように聞き取られて意味を成しているのか、その構造を研究する学問としての音韻学である。自然科学的に物理音としての音声の違いを区別し指し示す意味と間の関係を求めようとする音声学に対して、言語の音声、その差異を識別するところの，その言語集団の取り決め、文化内容、社会制度としての言語の研究である。そこには自然科学と社会科学という程の隔たりが存在する。

① プラハ言語学派の音韻論

ソシュールの言語理解をなぞるがごとく、言語音声の中に「音素」を見出したのはロシア人、トルベツコイであり、彼の《音韻記述への手引 Anleitung zu Phonologischen

---

[14] 丸山圭三郎　『言葉と無意識』P51　講談社現代新書 0871　2009 年 7 月

[15] 同上　P71

[16] 同上 p 10

[17] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P68　岩波セミナーブックス 2　岩波書店 2009 年 3 月

Beschreibungen》が 1935 年、そして没後の 1935 年《音韻論要理 Grundzüge der Phonologie》(1939)が出版されている。プラハ言語学派の音韻論の方向を定めたこの「音素」の発見、そしてさらにヤコブソンの「多数の音素間の相互対立からなる複雑な音素体系を二項対立（binaryOpposition)という考え方を用いてパターン化して現す」と言う発想、アイディアが展開された。

言語音声は「音素」と言う音の単位、日本語をローマ字表記した時の一字一字にあたるような、音を区分け、意味を識別する為の最小の音の単位で構成されており、その「音素」は、それぞれの音を区別して聞きわけ、識別に役立つ対立軸、たとえば無声/有声、母音/非母音、密/疎などの対立関係、二項対立関係で整理する事ができる。それらを弁別特性（示差的特徴）の二項対立としてとらえ、それらのセット（群）として世界中の言語音声を整理して捉え、世界中の言語はついに 12 対の弁別特性によって網羅する事ができる事がヤコブソンによって示された。

② 記号論としての言語論

プラハ学派（プラーグ学派）は、物理音としての言語音声と意味のつながりを求めようとする、当時の主流であった自然科学的な言語理解に対して、記号としての言語の構造、その聞き取られ方、意味の生成について、言語音声と意味の間には、何の法則性もない自由、「恣意的」であり、無意識からの指定あるのみとする。そして各言語集団毎に響きあい、聞き取られるところの意味の世界、各言語の意味の伝え合い、その記号論的構成を言語音の中に示した訳である。

ソシュールのアイデアをなぞるが如く、「音素の発見」「無意識の二項対立」、「記号としての言語論」が、プラハ学派、ヤコブソンらによって、言語音声の中に明らかされる訳である。

４．ソシュールのエピステモロジー

①フェルディナン・ド・ソシュール(Ferdinand de Saussure, 1857-1913)

ソシュールは、19 世紀の後半から 20 世紀初頭に生きたジュネーブ生まれ（スイス）の言語学者だが、生前は一冊の著作も残さなかった。しかし 1906 年から 1911 年にかけて、ジュネーブ大学において行った一般言語学の 3 回にわたる講義が、その没後聴講生、弟子達によって纏められ、1916 年に『一般言語学講義』として出版されている。

ソシュールのシフィアン、シニフィーユ、シーニョ、言語の恣意性というアイディアも、

この『一般言語学講義』の解読によるという「謎に満ちた生涯[18]」を生きた人である。この『一般言語学講義』は、世界で先駆けて日本語翻訳が小林英夫によってなされ、1928 年には『言語学原論』が日本で出版されている。アングロ・サクソン系ではそれから 30 年も遅れての翻訳本の出版[19]であり、「人間学、文化学一般にわたる方法論とエピステモロジーに、コペルニクス的な転回をもたらした[20]」というソシュールへの評価の浸透、その在り様はさまざまであった事がうかがえる。

弟子たちによる講義のまとめ『一般言語学講義』は、今では難点、基本的な誤解が指摘されているのだが、その出版から 40 年も過ぎて、1955 年 1 月、1957 年 12 月、1958 年の始めに相次いで講義の「原資料」が発見され、今では新たな解釈、検討がなされている。

それら講義の「原資料」は第二次大戦勃発の直前に、高名な学者だった彼の曾祖父と祖父の資料の散逸を懼れた親族が、大学図書館に預けたのだが、それらを図書館側が正式に譲り受けたいとして始まった戦後復興後の整理において、幸運にもフェルディナン・ド・ソシュール自身の手稿が多く混じっていたことが発見されたものである。

名門の出の天才でありながら、自身の思想は時代を覆いつくす近代科学的な認識の構図を書き換えようという未踏の思想、ソシュールは己の思想故の内面の衝撃、そして確信、あるいは「熱狂と苛立ち」でもあろうか、アナグラム研究に没頭しつつ 55 歳で病没している。

② エピステモロジー

エピステモロジーとは、「科学認識論」とも訳されているマックス・ウェーバーのタームだが、中世諸科学の思想や諸価値への「科学による批判」が行われたのが近代、近代西欧であるとすると、旧来の思想や諸価値への裁断の構図における、近代科学の側の「科学性」や「客観性」について、それ自体が一つのイデオロギーではないか[21]という視点をもって、「諸科学の方法論」、「諸科学の論理」を探ってゆく学問だという。

レヴィ＝ストロースは、『言葉と物』の中でフーコーが提示した命題[22]、異なったエピステーメー（認識世界）相互の乖離について語るのだが、丸山圭三郎はエピステモロジーについて、近代的知性の行う「認識の構図」に対する批判、あるいは「『科学的真理とは何かと言う問題 le problēme de la vēritē　scientifique』、さらには『 科学と哲学の間の諸関係の問題 le

---

[18] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P14　岩波セミナーブックス 2　岩波書店 2009 年 3 月
[19] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P17　岩波セミナーブックス 2　岩波書店 2009 年 3 月
[20]　同上
[21] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P9 岩波セミナーブックス 2　岩波書店 2009 年 3 月
[22] レヴィ＝ストロース／エリボン『遠近の回想』P204　みすず書房　1991 年 12 月 25 日

problēme des rapports entre science et philosophie』を探っていく[23]」学問であり、「諸科学の認識の構図への批判的研究」としている。

そして丸山は、ソシュールを「言語学批判を通して十九世紀的パラダイムの地殻変動を用意した思想家の一人」としており、さらに逆向きの表現によって、ソシュールの言語論は、さまざまな学問領域の枠を超えて「既成の枠自体への批判から出発する脱領域的営為としての記号学[24]」であり、エピストモロジーを通して始めてうまれてくるとも説明をする。

3．ソシュールの功績

ソシュールにおいては「読む」という行為と、「書く」という行為は切り離すことができず、「表現というものと内容は分離できない存在[25]」としてその言語観を展開している。この観点が「すべての表現作用、すなわち『身振る』『描く』『彫る』『歌う』『話す』『書く』という行為においては表現と内容というものは分離できない。[26]」という、人間の観念作用、その表現のされ方、指し示す意味内容、その一体性を示している。

① 恣意性・記号性

ソシュールは、人間の表現作用そのものである言語、その意味の伝え方、理解のされ方について、その言語音声の「物理音的な個性」と指し示す「意味」との間に、何の必然的関係はなく、音声の組み合わせ方、響き合いの差異のみが意味を生じせしめるとする。

言語音声と言語の指し示す意味の間には、必然的な関係、あるいは法則性を求める事はできず、いわば恣意的（非自然的）であり、全くの自由であり、音声の組み合わせ、響きの違いだけが、意味を決定する。この言語の性質を、ソシュールは「恣意性」と表現する。

人間が言語を発する時、その指し示す意味は、その音声の響き方の違いとして、人を取り巻く外界、環境（カオス）から、発語者が切り取って初めて生成するのであり、その時、その言語音声と意味との間の、無関係性、恣意性が言語の構造の特性であるという。

このような発想では、言語で表現されるべき、人を取り巻く環境、自然などの対象世界、現前の事実などの動かざる存在が、まず否定されて、それはカオス（混沌）だとされている。そして意味と言語音声を繋ぐものは、人の意識作用を外れて恣意であり、いわば「無意識」からの指定と言うべき世界であり、言語音声の聞き取られ方、区別のされ方、意味生成のし

---

[23] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P11　岩波セミナーブックス２　2009 年 3 月

[24] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P12　岩波セミナーブックス２　2009 年 3 月同上

[25] 同上 P24

[26] 同上　P25

かた、その秩序は、その社会の取り決めであり、文化内容であり、社会の制度であるという。

このような記号的な言語の構造、音声と意味の間の関係を、ソシュールは「恣意性（非自然性)」としている。そしてこの性質こそが、言語が記号としての構造を成している事、言語の意味の生成、その表現、言語の構造をつらぬく原理といえよう。ソシュールは記号論としての言語論を、20 世紀初頭のジュネーブで展開するわけである。

② 無意識の二項対立、音韻論

ソシュールが言語の構造を記号論として展開した講義は、近代科学的な各学問分野が生成、興隆へと向かう 20 世紀の初頭、1859 年にはダーウィンの進化論が発表されている。この時代の風潮の中で、当時の言語学は、科学的に物理音としての言語音声の研究を行う音声学、そして言語の歴史的な伝播、類縁性の研究を主流とする時代であった。

その中で、ソシュールの 1906 年から 1911 年のジュネーブ大学の一般言語学講義のⅠの序論において、言語音声を物理音としてその違いを区別しようとする音声学は、言語学の補助的学問であると指摘[27]し、さらにアナロジーを言語創造の一つの契機として強調している。

「音の組み合わせ」が異なると「意味」も異なり、あるいは消えるといった、音の選ばれ方、その響き合いの差異。「差異」のみが意味を決定し、言語音声の響きの違い、「差異」を選ぶ作業は、話す主体の意識のレベルを超えた、言語の「無意識のレベル」[28]での精神的操作を前提とする。音同士の関係、その響きの違い、「その音が持続するあいだ中、聴覚印象が同一であるかどうか[29]」が意味とのつながりを生じるという。

後にその音の差異を際立たせる二項対立する弁別特性（示差的特徴）を音素の中に見いだし、その組み合わせによって展開する、「差異」だけに規定される音と意味との繋がりを跡付けたのはヤコブソンである。

③ 差異の体系

そもそも「差異」とは他と比較された上での規定性であり、他との関係をもって初めて浮かび上がり、気づかれる事柄である。さらには差異がある、異なるという事は同一では非ずと言う意味で、否定的な規定性であり、かつその差異が明確に識別されるため、互いの差異を際立たせる、二項対立関係、弁別特性（示差的特徴）を要請する。ソシュールの記号論である言語論では、言語における言語音声構造へのイメージは、ここまでが予定されている。

---

[27] 同上　P63

[28] 小田亮　『レヴィ＝ストロース入門』P70 ちくま新書 265　筑摩書房 2013 年 9 月

[29] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P69　岩波セミナーブックス 2　2009 年 3 月

カオスと表現された自分を取り巻く自然、その真ただ中で、自らの気付き、感興によって発せられた言語音声、それがカオス（自然、外界）から切り取られた意味の発生であり、この意味と音声の間には無意識からの指定というべき「無意識の二項対立関係」を単位とする、音素の組み立てがイメージ（予定）されている。無意識からの指定あるのみ、恣意であり自由である音と意味の関係、記号としての言語の構造である。

この記号的な単位(シーニョ)の集合が、集団において使用され意味を伝えあう言語、社会の取り決め、文化内容、社会制度ともいうべき各言語へと向かうと言うイメージであろう。

ソシュールのジュネーブ大学講義Ｉの序論[30]の解釈では、記号として、差異の体系である言語の構造、「言語は無意識からなる差異のみの体系」であると言う観念は、1906 年に開始されたジュネーブ大学の一般言語学講義以前、既に 1894 年頃には完成させていた[31]とされる。フロイドの『夢判断』、無意識の提示は 1900 年である。

21 世紀の今日、私達は ON と OFF と言う一対の差異関係のみで構成するコンピューター言語が、大衆的に使用される時代を迎えて、記号としてのコンピューター言語における概念や意味の生成に接し、それを日常的に使用する中で、ソシュールの言語論に遭遇している。

④　言語名称目録観の否定

聖書においては、神の創造物たる森羅万象であり、その中に神の形に似せてアダムとイブが土をもってつくられ、神によって魂を授けられた。あらゆる動物は神に促されたアダムの命名に初めて名前を獲得した。「神に造られたこの宇宙、神に作られたこの宇宙ないしは自然というものは『第二の聖書』だった[32]」とも言われている。

この下で中世のスコラ学、神学は完成をみるのだが、それに対峙する西欧近代もまた、合理的探究（科学的探究 ）の基盤をつくったガリレイ（地動説)、ニュートン（万有引力）が活躍した 17 世紀、そして近代哲学の祖、ルネ・デカルト(1589-1650)は「われ思う、ゆえに我あり」として、考える主体としての自己（精神）とその存在を定式化する。

しかしながら、この命題こそが、神の合理的な存在証明としての、神が作り給うた「人」の営みである「近代的理性」、これが明らかにするもの、それこそを真実とする論理ともいえよう。そうであれば、コギトの哲学が、いわば逆説的に確認しているのが、動かざる絶対的真理の実在だったのではないだろうか。

---

[30] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P72　岩波セミナーブックス２　岩波書店 2009 年 3 月

[31] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P15　岩波セミナーブックス２　岩波書店 2009 年 3 月

[32] 渡辺正雄『科学者とキリスト』P26　講談社　1991 年 6 月 10 日

そして神の作り給うた自然、もう一つのバイブルとしての宇宙の摂理を読み解くという営為、自然の調和を読み解き愛でる学問として、中世世界において胚胎したという自然科学は、ケプラーが太陽系惑星の楕円運動の数学的秩序を発見して「もろもろの天は人間を取り巻く外界は、神が作り給うた完成され静止的な実体」とのべるように、自然と神羅万象、宇宙のありようを、神の造り給うた秩序ある実体として愛でているのであった。

神の造りたもうた自然の調和を読み解く側の人間の営みは、近代的な理性として展開し、その表現、意味を伝える言語作用とは、「客観的な世界の秩序や事象が先にあってその事物・現象に対して名前（名辞・記号）が与えられる」とする「言語名称目録観」、そしてまた形而上学的に構成する、諸概念、観念形態においても、それらを標すところの一般的理性、不遍的理性の表象たる言語活動としてイメージされるより他はなかったと考えられよう。

このようなアプリオリに存在する、厳然たる事実としての自然、それらを理性的に知る事ができると言う人間の理性、その営為を記すところの言語といった、これら近代西欧的な認識構図に対して、言語は「無意識の二項対立」の構造であり、言語音声相互の差異、言語音の響き合いの差異、相関関係によってのみ意味を生じ、記号的に意味を伝えあう構造体として、ソシュールの言語論は展開するのである。
ソシュールの言語観は、神学的世界観、そして近代的な認識の構図、その双方への根底的な否定、アンチテーゼであったと言えよう。

言語を記号（シーニョ）として理解するソシュールの言語論の提示した意味内容の衝撃、それは、動かざる対象であるべき、近代的自我が把握すべき対象世界（自然）は「カオス」であり、発語者の切り取った近代的自我の及ばざる「無意識」のはたらきこそが、言語の意味生成におけるすべての役割を演じている、そして互いの関係の中に浮かびあがると言う、エピストモロジーそのものに違いない。（以上）